

年齢によるホルモン変化が 糖尿病をまねく

● エストロゲンの分泌量が減るとリスクが高まる

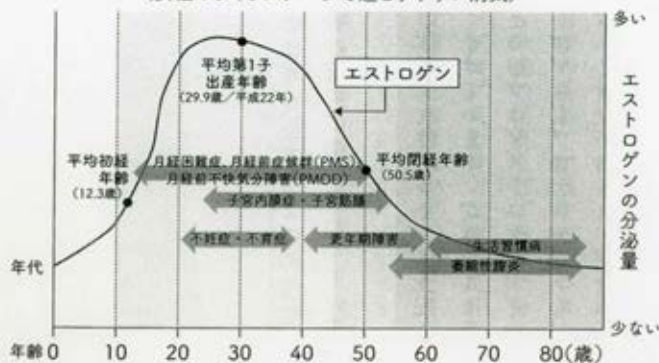
女性はなぜ60代、70代になると糖尿病にかかりやすくなるのでしょうか。その最大の要因は、女性ホルモンの「エストロゲン」にあります。

エストロゲンは、血液中のブドウ糖の量を調節する「インスリン」というホルモンの働きを調節する役割を担っています。血液中にブドウ糖の量が増えると、インスリンが分泌され、血液中のブドウ糖を全身の臓器の細胞に取り込ませて、エネルギーとして利用できるよう促します。血液中のブドウ糖を細胞に取り込ませることで、血液中のブドウ糖の量を減少させて、増えすぎないように調節しているのです。

もともと、エストロゲンは男性に比べて女性のほうが分泌量が多いため、女性はエ

エストロゲンの分泌量の変化

〈女性のライフステージで起こりやすい病気〉



ストロゲンの働きによって、血糖値が上がりにくい体質を保つことができている。しかし、そのエストロゲンの分泌量は、女性の場合、40代から減少し始め、閉経とともに急激に落ち込みます。

エストロゲンが減ると、インスリンの働きが低下する「インスリン抵抗性」の状態になるため、血糖値が上がりやすくなります。その結果、これまでエストロゲンの恩恵によって守られてきた女性の体は、閉経後になると、急に血糖値の調節が効きにくくなり、糖尿病の危険にさらされるようになります。